平城宮
第一次大極殿

大極殿

奈良文化財研究所

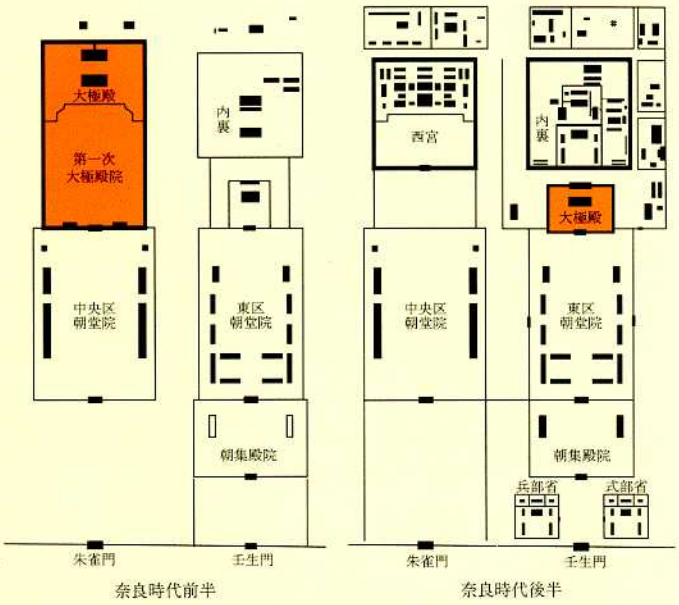
大極殿とは

大極殿とは古代の宮都における中心施設で、元日朝賀や天皇の即位など、国家儀式の際に天皇が出御する場所です。平城宮には、造営当初から恭仁京へ遷都するまでの大極殿（第一次大極殿）と、平城京に還都してから長岡京に遷都するまでの大極殿（第二次大極殿）の二つの大極殿が確認されています。

第一次大極殿院は、南北約320m、東西約180mの区画で、北側を一段高くし大極殿と後殿を南北に配置します。壇の南側は儀式の際に貴族が整列した広場です。これは、唐長安城大明宮含元殿にならって造られたと考えられています。周囲は築地回廊で囲まれ、南面には南門とその東西に楼閣を構えていました。

第一次大極殿の建物は、恭仁京遷都の際に回廊と共に解体され、移築されました。その後、恭仁宮大極殿は山城国分寺に施入され、現在も当時の礎石が残っています。

奈良時代後半の第二次大極殿は、第一次大極殿のあった朱雀門の北側の区画ではなく、内裏のある東側の区画に造られました。この時期、第一次大極殿のあった場所は大幅に改造され、称徳天皇の西宮として利用されることになります。



平城宮中枢部の変遷

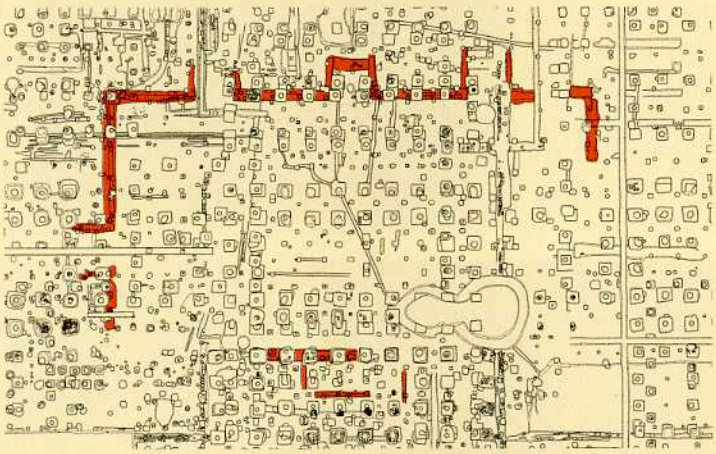
第一次大極殿院復原図

第一次大極殿院地区関連年表

和銅３年（710）	３月10日	平城遷都。大極殿は未完成か（大極殿院整地土出土木簡）。
霊亀元年（715）	１月１日	大極殿にて元日朝賀をおこなう。 （以後、養老３年（719）、神亀元年（724）、神亀４年、神亀５年、天平２年（730）、天平12年にも朝賀の記事がみえる）
	９月２日	大極殿にて元正天皇が即位する。
養老元年（717）	４月25日	西朝にて大隅・薩摩国の隼人の風俗・歌舞を見る。
神亀元年（724）	２月４日	大極殿にて聖武天皇が即位する。
天平元年（729）	３月４日	大極殿にて叙位・任官をおこなう。
	６月24日	大極殿閤門にて隼人の風俗・歌舞を見る。
	８月５日	大極殿にて詔して天平に改元する。
天平４年（732）	１月１日	大極殿にて元日朝賀をおこない、天皇が初めて冕服（中国風の冠・礼服）を着る。
天平７年（735）	８月８日	大極殿にて大隅・薩摩の隼人の朝貢を受ける。
天平８年（736）	１月17日	南楼にて群臣に踏歌節の宴会を催す（類聚国史）。この頃までに南面築地回廊に東西楼閣を増設する（SD3715出土木簡）。
天平９年（737）	10月26日	大極殿にて金光明最勝王経講説をおこなう。
天平12年（740）	１月17日	大極殿南門にて大射を見る。
	12月15日	恭仁京に遷都。その後大極殿と歩廊を恭仁宮に移築する。
天平18年（746）	９月29日	恭仁宮大極殿を山背国分寺に施入する。
天平勝宝５年（753）		この頃大極殿院南面の東西楼閣を解体するか（東西楼出土木簡）。
天平神護元年（765）	１月１日	西宮前殿にて元日朝賀をおこなう（類聚国史）。
宝亀元年（770）	８月４日	称徳天皇が西宮寝殿で崩ず。

第一次大極殿の発掘調査

第一次大極殿の発掘調査は、1970・1971・1998年におこなわれました。基壇そのものや礎石の痕跡などはすでに失われていましたが、大極殿の基壇外装に使われた地覆石の抜取痕跡を検出しました（図着色部分）。



第一次大極殿の遺構平面図

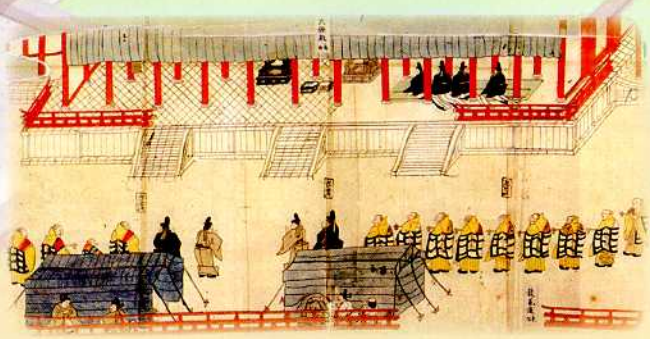
遺構検出状況（建物の西側半分。人は柱推定位置。南西から）

第一次大極殿復原の考え方

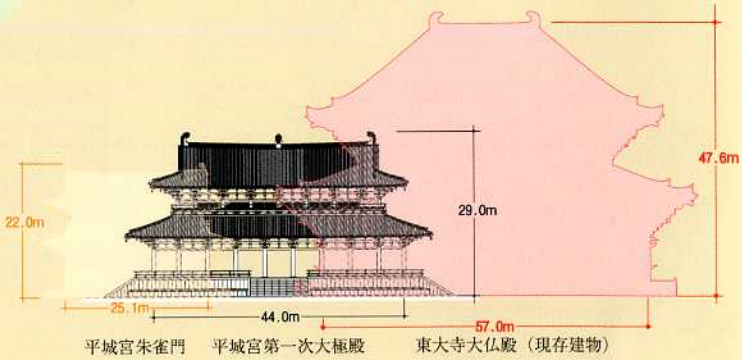
第一次大極殿復原の第一の手がかりとなるのが、発掘遺構と瓦、石などの遺物です。第一次大極殿が移築された恭仁宮大極殿の遺構も加味して、基壇の形と建物の平面、規模が復原されます。また、『続日本紀』をはじめとする文献史料や、『年中行事絵巻』などの絵画資料も、復原研究には欠かすことができません。ただし、基壇の上に建つ木造部分の形を知りうる直接の資料は限られているため、現存する古代建築を調査研究することで、遺構から復原される基壇と建物平面に合致する建物を推定していきます。

第一次大極殿は、その機能と象徴性、同時代の寺院金堂の形式から、重層建物であったと推定しました。平面の上でも立面の上でも巨大な規模を持つ大極殿は、古代の建築技術の限界に挑むような建物といえます。よって、現存する古代建築の構造・意匠・技法を徹底的に再分析し、技術の原理を追求することによって、遺構に合致する形態を模索しました。

重層建築としての基本構造は、現存唯一の重層金堂である法隆寺金堂にならうことで、合理的な構造を実現しました。組物や軒の形は時代の近い薬師寺東塔にならっています。



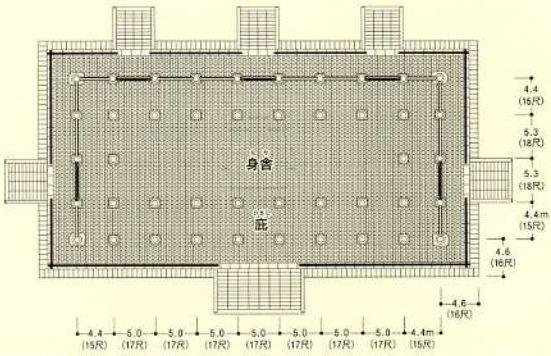
『年中行事絵巻』に描かれた平安宮大極殿



第一次大極殿の大きさ比較

基本的な構造と形

平面



第一次大極殿復原平面図

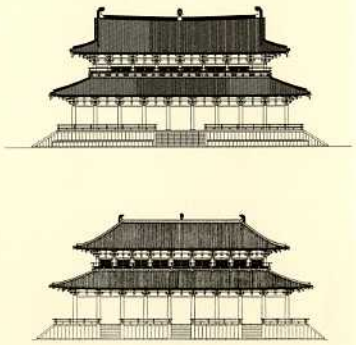
基壇は、二重基壇の形式で復原しました。全体は東西180尺（53.2m）、南北97尺（28.7m）で、上の基壇は173尺×90尺の規模となりました。

建物の初重は、東西９間149尺（44.0m）、南北４間66尺（19.5m）の規模を持ちます。正面17尺（5.0m）×７間、奥行18尺（5.3m）×２間の身舎の四周に、出が15尺（4.4m）の庇が廻ります。柱間装置は、『年中行事絵巻』に見える平安宮大極殿の形式等より、正面はすべて開放され、庇の両側面と背面が壁と扉で閉じられたものと考えられます。

二重は、法隆寺金堂にならい、初重身舎より各面0.5尺ずつ広く、柱間は初重より１間ずつ少ない正面８間、奥行３間の規模としました。各面の端の間は土壁、他は連子窓とし、連子窓中央には間柱が立ちます。

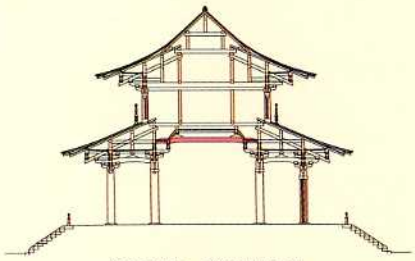
屋根の形

二重の屋根形式は、両側面に三角形の妻が顔を出す入母屋造で復原しました。『年中行事絵巻』の平安宮大極殿の屋根形式や奈良時代以前の重層寺院金堂の例等からの推定です。研究過程では、寄棟造案、錣葺案も検討されました。



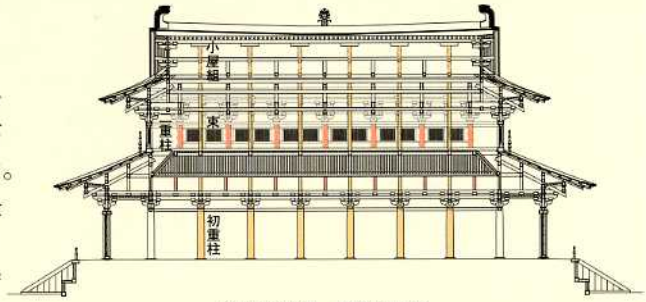
屋根形式諸案（上：入母屋造最終案、下：寄棟造案）

重層の構造



復原原案　梁行断面図

復原最終案　梁行断面図



復原最終案　桁行断面図

平面が大規模でかつ重層である大極殿は、古代の技術で構造の安定性を確保することがとても難しい建物です。重層建築の特徴を調査した結果、現存唯一の重層金堂である法隆寺金堂の形式が優れた合理性を持つことがわかり、大極殿の構造もその原理にならいました。

大極殿は身舎の奥行が深いため、二重の中間を束で支え、その束を初重天井より上で受けなければなりません。復原原案では、この束を受けるために、唐招提寺金堂を参考に初重身舎に大梁を架けましたが、身舎の柱上組物に大きな歪みが生じることとなります。復原最終案では、法隆寺金堂の形式をもとに、天井の支輪に方杖としての構造的役割を担わせることで、屋根の荷重を合理的に初重に伝える方法を採りました。

また、法隆寺金堂にならって、屋根を支える小屋組を二重柱の中間に配したことで、むしろ初重の柱と位置が揃いました（復原最終案桁行断面図参照）。これは、小屋組の荷重と二重の軒の荷重をそれぞれ二重の柱と二重中間の束で分担して初重に伝えることのできる、重層建築独得の構造上の工夫と考えました。

組物と軒

軒の出は16尺に復原し、薬師寺東塔にならい、垂木を２段に出す二軒としました。軒反りは、全長に渡って反りを持たせつつ、両端で強く反り上がります。この反りを形作るために、外側の柱には、隅へ向けて徐々に高さが高くなる「隅延び」を付けています。

組物は、16尺の軒の出より、古代で最も格の高い三手先組物であることがわかります。形式、意匠ともに時代の近い薬師寺東塔の組物にならいました。斗には、直上の材と木の繊維を直交させて割れを防ぐ「木口斗」の手法を用いており、正面に年輪の見える木口面が向きます。大斗や尾垂木先の斗等の荷重のかかる部位には欅材を用いています。

高欄

高欄は、基壇上と初重屋根上の四周に廻ります。法隆寺金堂、薬師寺東塔にならい、３段の横材を束で支え、二重ではさらに下に三斗と人字形の割束を入れる形式としました。

木口や釘が打たれる部位には、雨水等からの保護のため金具を打ちます。束の上には五行色に対応する５種の色玉を配した宝珠付き金具を打ちました。

扁額

扁額の形と規模は、建物の形式とよく対応することがわかりました。古代の大規模建物にふさわしい扁額として、肩と脚が張り出す形式で復原しました。

額字は、作成年代の近い「長屋王願経」（712年）奥書から集字しました。

外

金具

風鐸は、上下各重の屋根の四隅にある隅木から吊られる金具で、金銅製です。鐘状の鐸身の内部から板状の風招が吊られ、風に揺られて音を奏でます。

木口金物は、垂木、隅木、尾垂木の先端の、腐食しやすい木口を保護するための金具で、装飾としての意味も持ちました。文様は、大官大寺出土隅木先金具を主に参照しつつ、奈良時代前後の文様の特徴を詳細に分析した上で、８世紀初頭にふさわしい宝相華文様として新たに描かれました。

柱と壁

柱は、直径は柱間の１割４分の２尺４寸（709㎜）、高さは17尺（5.0m）とし、形は下から1/3より上に徐々にすぼまる形式としました。木部は丹土で塗装しています。

壁は、檜の割材で下地を組み、荒壁、苫入りの中塗り、白土の上塗りを施した伝統工法で復原しています。

基壇・階段

法隆寺金堂の二重基壇

発掘で確認された基壇外装と階段の痕跡より導きだされた寸法を基準として、基壇の高さや階段の傾斜を検討しました。階段の傾斜は第二次大極殿出土羽目石や恭仁宮大極殿の階段遺構を参考に約32度としました。基壇の高さは階段の傾斜と階段の出をもとに、11尺５寸（3.4m）としました。この高さは、通常考えられる一重の基壇より格段に高いため、法隆寺金堂にならい、二重基壇として復原しました。石の種類は竜山石と呼ばれる兵庫県産の凝灰岩です。

部の
形

鴟尾と大棟中央飾り

大棟中央飾りは、同時代の中国にみられ、日本でも西大寺薬師金堂には載せられていました。大棟中央部の蓋が象徴的なものに変化したと考えられます。形は法隆寺東院夢殿の宝珠を参考にしています。

鴟尾は、大棟、降棟と妻との要に位置するもので、雨水の浸入を防ぐ役割を担いつつ、建築の格式を表現するものです。形状は、初唐様式の影響の強い形に復原しました。宮内に出土例がないことから、金銅製と考えられます。総高は2.58mに及びます。

屋根瓦

第一次大極殿院出土軒瓦

瓦は、出土遺物を忠実に復原しました。「いぶし銀」とは異なるしっとりとした黒色は大極殿出土瓦特有の色で、唐長安城大明宮にも用いられた黒い瓦を模した可能性があります。

大棟、降棟、隅棟の取り付きや端部など、雨仕舞上の要点をなす部位のおさまりは、法隆寺玉虫厨子や中国、韓国の事例を参考に、機能と形が合致した古代の形式に復原しました。

礎石と敷石

礎石は、第一次大極殿を移築したという恭仁宮大極殿跡に残る礎石をもとに復原しています。ほとんどの石は凝灰岩製ですが、四隅の石は花崗岩を使用しています。他の部分よりも荷重のかかる部分には強固な石を使用するという、古代の工夫がみられます。

恭仁宮大極殿に残る礎石
（上：花崗岩、下：凝灰岩）

恭仁宮大極殿の凝灰岩礎石には、隅に欠き込みが見られます。これは敷石をはめるためのものと考えられるため、基壇上面に敷き詰められる敷石を、建物と平行に敷き並べる布敷としました。

内部の形

二重の内部

二重には内部空間がありますが、床を張らず、使用することを前提とはしていません。

古代における重層建築では、一般に二重以上の内部空間を使用するようには造られておらず、二重は格式の高い外観を造るために設けられたと考えられています。

天井と支輪

天井は、身舎の全体にわたり、支輪で高く折り上げられて設けられています。天井桁の間に太い木材を格子状に組んで上に板を載せた組入天井という形式です。法隆寺金堂にならって天井桁のみで支持され、天井下に大梁が入らないため、一体性があり、上に高く立ち上がるような、大極殿にふさわしい内部空間となっています。

支輪は、身舎の天井を斜めに折り上げる部分です。上方に伸びやかに立ち上がる天井廻りの空間を形成するとともに、奥行の深い大極殿の二重屋根の荷重を支える方杖の役割も果たしています。

天井彩色

天井の格間には蓮華文が、支輪板には蓮華を図案化した彩色が施されています。古代の彩色は、暈繝彩色という、同系統の色を淡色から濃色に並列する表現によって描かれていました。この彩色文様の形と色遣いをもとにしながら、上村淳之画伯によって、原画が描かれました。

天井・支輪彩色原画
（上村淳之氏画）

高御座

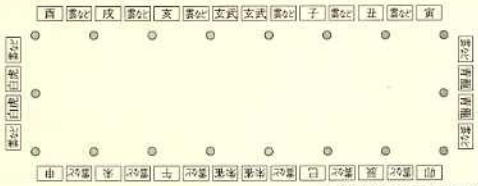
天皇が着座する玉座です。文献史料等による検討を加え、外観のイメージを実物大で表現しました。上部を覆う蓋には、鳳凰、鏡などの装飾が付きます。

扉

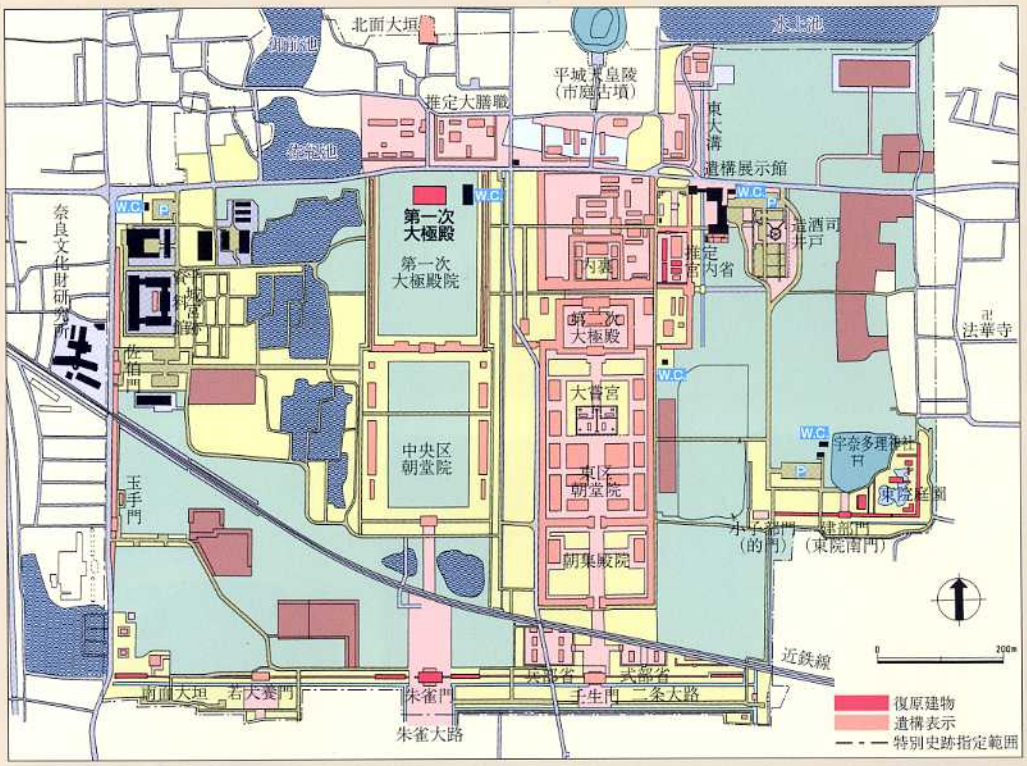
扉は、両側面に1カ所ずつと背面に3カ所設けています。正面が開放のため扉に強い風圧がかかることなどから、内開きと推定しました。縦板5枚を組み合わせ、横桟に釘止めしています。釘の頭と軸付近の上下にはそれぞれ金具を打ちます。

小壁彩色

四周に巡る小壁には、彩色（壁画）が施されていたものと考えました。画題は四神ならびに十二支と推定し、四神は各面の中央の束を挟んで対に描いています。すべて、上村淳之画伯の手になるものです。



小壁彩色の画題配置

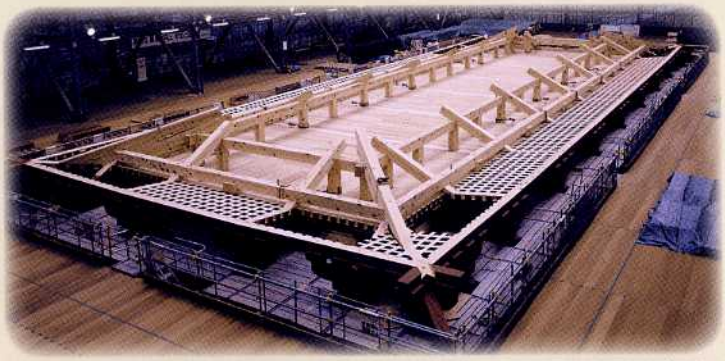


世界文化遺産 特別史跡　平 城 宮 跡

昭和57年（1982）	第一次大極殿復原初案（『平城宮発掘調査報告XI』）
平成４年（1992）	第一次大極殿復原研究開始
平成５年（1993）	第一次大極殿院1/100模型制作
平成６年（1994）	第一次大極殿1/10模型制作
平成７～８年（1995-6）	基本設計
平成９年（1997）	実施設計準備
平成10～12年（1998-2000）	実施設計（以上奈良文化財研究所事業）
平成13年（2001）	復原整備工事着工（以下文化庁事業）
平成16年（2004）２月	立柱
平成18年（2006）12月	上棟
平成22年（2010）４月	竣工

復原研究と工事の経過

部材の加工・仕上げには古代の道具を用いました。写真のヤリガンナ仕上げに加え、柱はチョウナで加工しています。



外観だけでなく、構造にも古代建築の特性を活かしています。免震装置の導入とあわせ、補強は最小限に留めることができました。

基壇は、遺構を盛土で保護した上に、杭を打たずに築かれています。基壇内部に免震装置を導入し、地震力を軽減しています。

屋根荷重の軽量化をはかるため、実際の屋根瓦施工では、瓦の葺き土を用いず、各瓦を縦桟に銅線で留める「空葺き」としました。

木材はほとんどの部分で檜を用いています。組物の大斗などの荷重が集中する箇所には、古代の例にならい欅を用いました。

平城宮　第一次大極殿

発行：2010年４月

〒630-8577　奈良市二条町２－９－１

独立行政法人 国立文化財機構　奈良文化財研究所

TEL 0742-30-6753　FAX 0742-30-6750

インターネットホームページ　http://www.nabunken.jp